

## 編集後記

6月の初め久しぶりに学会(112回日本精神神経学会総会、幕張メッセ)で講演した(2016年6月4日)。「先達に聴く」というセッションで、タイトルは「私の研究と生活」である。久しぶりという理由は「学会に出るとバカになる」と思えたためで、実際どこの学会もいたずらにマンモス化し、焦点はボケ、立論の前提は甘く、自分が見たいように物事を見る反知性主義が跋扈している。製薬業界のディオバン事件に限ったことではなく、大阪の有名料亭の残菜の使いまわしや三菱自動車を初めとするデータ偽装など、不誠実な営為が各方面で後を絶たない。

精神神経学会は、他の学会と比べると「声なき患者の声」を聴く姿勢において優れていることを、私は誇りにしていた。しかし「医者の中に階層を作らぬ」ことをモットーとしていた志清き若き精神科医たちは、権力を奪取するや、厚生労働省当局にすり寄って、あれだけ反対していた専門医や指定医になだれを打つようになりたがり、多剤投与や効果の不確実な精神療法により利益を得、集客を図っている。聖マリアンナ医大で精神保健指定医の資格取得のために症例の使いまわしがあって資格停止となった事件に対しても、精神科医のプロフェッショナルイズムとして実情分析に基づく防止策の議論に時を費やす様子はみられない。

今回「私の研究と生活」と題して、60年間にわたる医師としての研究を振り返り、挫折と転回を含めて反省するものであった。1時間の講演では思うことの3分の1も伝えられず、いずれ機会を改めて発表したい。心残りだったのは、学会にたいする爆弾宣言めいたことをするチャンスを逸したことや、コントローラー委員会/臨床評価刊行会の活動についてもわずかしら触れられなかったことであった。わが会の設立者佐藤倚男氏は、私が師事もし、また兄事とする先輩なのであるが、彼について私が尊敬することは、第一に、全体を見るかす視野の広さである。次には、新しいシステムを作るに際し、かならず自分のわがままが効かないヘッジシステムをあらかじめ組み込んでおくことだった。統計の専門家たちはいろいろと複雑な方法を駆使して自分を売り込んできた。佐藤先生はフルプルーフな $\chi^2$ 乗検定に固執していたが、それによって弱小製薬会社の開発担当者が、どれだけ裨益されてきたか知れないのである。しかし生データを尊重する文化をわれわれが推進したにも関わらず、今やデータ解析はBig Pharmaの手中のものとなり、マモン神崇拝の文化のもとで、データの偽装は花盛り状態である。佐藤先生の清々さに惹かれてか、私はこの雑誌の編集長になり、44年間に過ぎた。

前号の44巻1号でICMJE(医学雑誌編集者国際委員会)による臨床試験の生データ共有についての声明(翻訳)を掲載し、巻頭言においてもその意義を紹介したが、本号において投稿規定を改訂し、データ共有計画がある場合には論文中または編集部への書状に記載することとした。また本号では「生命倫理と研究倫理の過去・現在・未来」のテーマで特集を組んだ。今後、これらのテーマについての寄稿を期待したい。

(栗原雅直)